
夏祭り

蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏祭り

【Nコード】

N9615V

【作者名】

蓮

【あらすじ】

西英。いつもと一変、かなり甘い話になってます。リクエストしていただいた品で、「菊の家に遊びに来た西と英が夏祭りに行く（出来れば甘く）」というものです。 pixivやブログにて同じものアップしてます。

（前書き）

かなりちゅっちゅしてますので注意。そして甘いです。（当社比）

この時期、日本という国は随分暑く、そして賑やかだ。

暑いのは仕方が無い事だろう。何せ本国よりも南に位置している。だが、この賑やかさは何だろう。二日程前にこの日本という国に、友人を訪ねてやってきた。もう既にその日には皆どこか浮き足だっていた。そして昨日、何だか外が騒がしかった。

この国にやってきた時には一日日本文化を堪能して、翌日には帰ろうと思っていた。なのに、何故かその友人が「もう何日か泊まっていられませんか」と提案してきたのがきっかけで、こうして今も此処にいるというわけである。

「………これ、お前んちの“ユカタ”だよな？」

国の象徴、というか、国そのものであるアーサーはこの国そのものである本田菊の家に遊びにきていた。勿論、アポイントメントは取っている。どこかのA K Yとは違う。

その国にやってきて三日目。詳しく何日泊まっていけ、とは言われなかったが、何日か、と言われたからには今日を最後に帰るという事でもあるまい。少なくとも明日まで居る事にはなるだろう。それに、外は薄暗くなってきたというのにそんな時間になってからこんな日本伝統の服を着せられている、という事はまあつまりそういう事なのだろう。

「ええ。夏にあるお祭りの時などによく着るものなんですよ。昨日も着ている方、大勢いらっしゃったでしょう？」

菊の家は、ほぼ毎月のように何かイベントのようなものがある。8月はこれといったイベント事は無いらしいが、こうした祭りや、

中旬には墓参りをする行事などもあるらしい。菊本人は欧米文化が全く解らないと言っているが、欧米の人間からしてみれば日本文化の方がよっぽど理解不能だ。

菊の言葉に、「ああ」と返して頷く。昨日も、今アーサーが着せられている浴衣を着ている人が多かった気がする。夏はそれが普通なのかと思っていたが、そうでもないらしい。

という事は、どうやら昨日も祭り、というものをやっていたらしい。

この国の祭りには色々種類があると聞いた事がある。どうやらこの時期に行われる祭りは夏祭りというらしいが、どんな祭りであれ今まで連れて行ってもらった事のある祭りでは人がかなり多く、移動するのにも大分苦労した記憶がある。

「……もしかしてその祭りとやらに行くのか？」

菊の家に遊びに来た際に浴衣を着せられた事は何度もある。風呂上りに着替えとして置かれていた。旅館という日本風ホテルなんかではパジャマ代わりによく出されるのだそうだ。それと同じ要領なのだろう、という事は解ったが、今は風呂上りでもなければ寝るわけでもない。ましてや、こんな縦縞以外の模様が入った浴衣を、今までに着せられた事は無い。

その夏祭りとやらに行く、という可能性しか考えられない。

「嫌、ですか？」

少しだけ首を傾げさせて意外そうに訊いてくる菊は多分、完全なる善意だったのだろう。

祭りそのものが嫌なわけではなくて人ごみが嫌だ、というだけだが、それでも祭りに行きたくないという意思には変わりはない。しかし折角の善意を無碍にするわけにもいくまい。他の国ならともか

く、相手は数少ない友達だ。

殆ど貼り付けた笑みで、「いいや」と返事をする。やはり押しに弱い。特に菊相手には。そう、再認識する。

「本田あゝこれ上手く着れへんのやけど」

突然情けない声が聞こえて、襖が開く。入ってきたのはアーサーと一緒にこの家を訪ねてきた人物だった。

情けない声から何となく予想はついていたが、顔も随分と情けない。今にも涙目になりそうなその表情に、思わず溜息を吐く。

「お前……自分で“親分やから一人で出来るで！任せときい！」とか言っただろうが」

10分程前その人物が言っていた台詞をそのまま彼に突きつけて、呆れ混じりの視線を遣る。う、と言葉に詰まったように今度こそ涙目になった彼にもう一度溜息を吐いた。

苦笑して困ったように彼の事を見る菊。

「……俺は何度が着付けしてもらってるし、もう殆ど終わってるから残りは自分で出来ると思う。そういう事でアントーニョの着付けしてやってくれ」

もう帯を結ぶだけだし、それくらいなら出来るだろうとそう申し出る。だがどうも躊躇っている様子の彼にいいから、ともう一言後押しをして、帯を手取る。

アントーニョは浴衣に袖を通しただけで前をあわせる事すら出来ていなかった。それでよくもあんな事が言えたものだと思わずも彼らしさに思わず小さく笑みを零す。

少しだけ時間を掛けて帯を結び終える。菊にやってもらうよりは

形が歪になったが、まあ大した問題は無いだろう。

アントーニヨの方を見ると流石普段よく着ているだけあって、前も合わせ終わり後は帯を巻いて結びつけるだけだった。流石菊だ、と内心で賞賛する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・これで、終わりです」

そう言っただけで着付けられたアントーニヨの浴衣は綺麗だった。アーサーの場合、最後の最後で若干歪んでしまったせいで違和感がある。それを見兼ねてか、静かに微笑んだ菊がもう一度アーサーの帯を結びなおしてくれた。

「あ、ありがとな、菊」

何だか申し訳無いのと照れくさいのとで、少し頬を染めて言う。いいえ、と先程と変わらぬ笑みを浮かべている菊は、本当に親切だと思う。いい友達を持ったものだ。自然と頬が緩む。

しかし浴衣を着る度に思うが、何とも動きづらい服装だ。丈が丁度良いからいいものの、もし少しでも長ければ誤って裾を踏んづけて転んでしまうかもしれない。というか、実際それをやってのけた事のある人物を知っている。

「そろそろ行きましょうか。賑わってる頃ですよ」

玄関へ向かう菊の後ろを着いていく。「楽しみやんなあ」なんて浮かれた声を後ろに聞きながら、浴衣を着る場合にセットで履くらしいこれまた動きづらそうな履物を履いて、外へ出た。

* * *

「では、私は此処で」

祭りの行われるらしい場所の入り口付近で、突然菊はそう切り出した。

「？一緒に行かないのか？」

菊の格好も浴衣だし、てっきりこのまま同行するのかと思っていたのだが。そんな思いから訊ねてみる。横目でアントーニヨを盗み見ると、既に爛々と目を輝かせて祭りで賑わっている方向を凝視していた。子供みたいなの姿はまるであの可愛がった元弟のようで、笑いだしそうになるのを何とか堪えて菊の返答を待つ。

ドドドドド、なんて地響きのような音が聞こえてきた。その音に混じって、菊の控えめな言葉は辛うじてアーサーの耳に届いた。

「そうしたいのは山々なんですが……」

「菊ー！！」

かと思いきや、その声を掻き消すように聞きなれた元気な声が響く。同時に姿を現した人物に、アーサーは目を見開いた。

「アル！？」

アーサー達と同じように浴衣を着て現れたのはアルフレッドだった。菊の家に居る間は全く見かけなかった。いつの間にこちらに来ていたのだろうか。

此処へ来て早々屋台が並んでいるところを見ているアルフレッド。その姿は本当にアントーニヨとそっくりで、今度こそ我慢で出来ずに噴出してしまった。この二人は普段馬が合わないくせに、こういう子供っぽいところだけはそっくりだ。

隣を見てみると菊も微笑ましそうにその光景を見ている。不意に目が合つて二人揃つて破顔した。

「嗚呼、もう。そんなお姿で走つてこられるから、浴衣が着崩れしているではありませんか」

そう言つてアルフレッドの浴衣を甲斐甲斐しく直す菊。菊はアーサーに負けず劣らず童顔だし小柄だ。おかげでアルフレッドより幾つも年下に見えるのに。傍から見れば、大分おかしい光景ではある。

「……こういう事ですので二人で回ってください」

につこりと微笑まれて、確かにアルフレッドが居るとゆっくり回る事は出来ないだろうからと言葉に甘えさせてもらう事にした。先程よりももっと申し訳ない気持ちになったが、折角アントーニヨが居るのだから、二人で回れるのならゆっくりこの祭りというものを楽しみたい。

多分、そういう配慮を兼ねての事なのだろう。本当に気が利く良い友人だ。

「アントーニヨ、ほら行くぞ」

内心でお礼を言いながら、未だに祭りの行われているところをきらとした目で見つめ続けるアントーニヨの袖を引っ張った。途端にアーサーを追い越して中に入っていく彼を見ると、子供の付き添いをしているような錯覚に陥る。が、これでも一応アーサー

とアントーニヨの關係は恋人であり、更に言うならアントーニヨの方が年上である。

ふと菊を見ると、菊もこちらを見て目配せしてきた。それに小さく困ったように笑う事で返事をして、早くと急かすアントーニヨの方へと歩いていく。

「人多いなあ」

心底嬉しそうに言うアントーニヨの横顔を見る。やはり爛々と輝いていて、とても年上だとは思えなかった。

アーサーは新年の初詣だとかに何度か行った事があるため、こういう屋台も見た事がある。初めて見た時はそれは物珍しそうに色々見ていた記憶があるが、此処まではしゃいでは居なかった気がする。寧ろ、一緒に行ったアルフレッドの方がはしゃいでいて、おかげで迷子になったアルフレッドを探したり、無駄に高いテンションで売りを困らせていたアルフレッドを何とか宥めたりと大変だった記憶がある。

そう思うとやはり、菊一人にあの見た目より幾つも子供なアルフレッドを任せるのは酷だっただろうか。

「アーサー、あのふわふわしたのなんやと思う!？」

不思議なものを見るように言いながらアントーニヨが指差したのは、確か綿菓子というものだった気がする。雲のような見た目と、そんな見た目に反して随分甘かったのが印象的でよく覚えている。それを教えてやろうと口を開いた時にはそれが並ぶ屋台へ向かっていた。

これはもしかしたらアルフレッドが居ても居なくてもゆっくりは回れなかったかもしれないな。そう思ったがアントーニヨと二人でという事実は変わらないしまあよしとする。

「ほら、食ってええで？」

いつの間にか戻ってきていたアントーニヨに、その白い綿菓子を差し出される。彼を見てみると一つしか買っていないようで、もう片方の腕には何も持たれていなかった。

過去に食べて口の周りがべたべたした記憶があつて、あまり好きな食べ物ではないのだが。しかし彼があまりにもにこにこ笑つて見てくる為、それを無碍にするわけにも行かず躊躇いがちにふわふわとしたそれを口を含む。

やはり、甘い。甘いのは好きだが、やはり口のまわりがべたつくのが酷く不愉快だ。

口の周りのべたつきを指で拭っている間に、アントーニヨはそんな事全く気にならないように随分嬉しそうに食べている。そういえば、アントーニヨも甘いものはそれなりに好きだったか。

「次、あれやろや」

気がつけばもう食べてしまっていたようで、切り替えが早い事に射的を指差して、返事をする暇も無く腕を引っ張られた。本当に、無邪気だ。

さつきから緩みつばなしの頬を自覚しながら、敢えて引き締めなおす事はしなかった。

「どうせなら勝負しようや」

「……………いいぜ」

自信満々の笑みで言われて、やや間を空け答える。射的などの腕にはアーサーも自信がある。アルフレッドなんかが相手ならまだ解らないが、アントーニヨが相手ならば勝てる。

二人で大人気も無く言い合いながら兎に角撃った。

* * *

結果は勿論、アーサーの圧勝だった。

それにより火がついたらしいアントーニヨによってその後三度程勝負を挑まれ、全て圧勝した後今度は投げ輪で勝負して見事に負けた。ボール掬いで二人ともひとつすら取れず終わって情けで屋台の人にボールをそれぞれ三つずつ貰ったり、屋台に並ぶ食べ物片っ端から買ったり（食べたのは殆どアントーニヨだ）。

年甲斐も無く楽しんだ。

「はー、夏祭りっちゅーんは楽しいなあ」

屋台のある人が多い場所から少しだけ離れて、一休みする。アントーニヨが言った言葉に頷いて、段差の低い階段に座り込んだ。

去年もそれなりに楽しんだが、今年は去年以上に楽しめた。その理由は一概にアントーニヨが居たからだろう。アントーニヨは単純に祭りそのものを楽しんでいたようだが、アーサーは半分ほどアントーニヨと一緒にという事実を楽しんでいた。

それほどアントーニヨに惚れ込んでしまっている自分に心の中で苦笑して、此処へ来る前に屋台で買ったミルクティーを一口飲む。アーサーの肥えた舌には、あまり美味しくは無い。そもそも、紅茶にしてもミルクティーにしても冷えていないのが美味しいのに。

「あ、それちょっとくれや」

隣から聞こえてきた声に、無言でペットボトルを渡す。すぐに聞こえてきた喉を鳴らす音に、ちよつとどこるか結構飲んでいるのではないかとも思ったが別に問題は無い。美味しくはないし、そんなに欲しいわけでも無い。

「これ、アーサーが淹れてくれたやつのが美味しいやんなあ」

口を尖らせてそう言いながらアーサーに返すアントーニヨ。口を尖らせているところを見ると、期待を裏切られたと思ったか何かなのであるうがそんな風に言われたアーサーは無論、内心喜んでいた。口角が上がるのを自覚して、慌てて直す。

す、と不自然でない程度に目を逸らして、地面を見る。甘い匂いに釣られてか、蟻の行列が出来ていた。何処へ向かっているのかは解らないが、屋台が並んでいるほうではない。何となくやる事もなく蟻の行列を見つめる。

ふと視線を感じて顔を上げる。刹那、視界いっぱいにはアーサーより深く濃い色をした緑が広がって、唇に柔らかく熱いものが触れた。キスされている。認識して、ゆっくりと目を閉じる。顔に熱が集まっている事には気付かぬフリをした。

冷たいような、しかし彼の口内の温度でか温くなってしまっている液体が、アーサーの口の中へ入ってきて、嚥下する。それが彼が屋台で買って飲んでいたものであると気付くのに、大して時間は必要としなかった。

「………、美味しい？」

口を離し少し間を空けて訊いてくる。一体どちらの事を言っているのだから解りやしない。何だか意地の悪い訊き方だったので、ふいと顔を逸らして「別に」と答えてやった。

ちらりと視線だけ遣る。さも愉快だと言つかのように無邪気に笑っていて、嗚呼自分はこの顔に弱いのだと、今更ながら再認識した。ふと気付いた。話し声がする。多分、少し離れているだけの此処だから休憩場所には結構頻繁に使われるのだろう。二人きりのこの空間が心地好かったのだけれど、そろそろその時間も終わらしい。名残惜しいのとまだ少し疲れているので重い腰を上げようとして、一段上に座っていたアントーニョがアーサーの腕を引っ張る。

「？な、」

に、と言葉を続けようとして、再び唇に先程と同じ熱くて柔らかいものが触れた。アントーニョはアーサーに覆い被さるようにしている。

話し声は大分近付いてきているのに、アントーニョは全く離れようとしなかった。肩を押しても、叩いても。頬と後頭部をがっちり掴まれていて、どうしようもなく身動きが取れない。

離せ、と叫ぼうとして出たのはくぐもった声だけだった。

やっと離れた時にはすっかり息も上がっていた。話声も聞こえない。

「っ………、見られたらどうすんだ!!」

何とか息を整えて叫ぶ。彼は全く悪びれた様子も無く、笑っていた。

「大丈夫やって。アーサーは頭しかあの人らには見えてへんかったやろし、男女がキスしとるくらいにしか思われへんかったやろ」

言われたその台詞で、気付く。彼は態とあのタイミングでキスした。映画なんかでよくあるような遣り方で、此処へやってきた人達

を追い返す為に。

今度こそ、完全に顔に熱が集まってしまった。幾ら男同士だとばれなかったとはいえ、見られていたのだ。言葉を失ってただただ俯いていると、今度は機嫌を取るかのような軽いキスが降ってきた。

「堪忍したって？もうちょっと二人だけで居たかってん」

今度は少し申し訳なさそうにへらりと笑いながら、まるでちょっとした悪戯がばれた子供が母親に謝るように。

そんな風にそんな事を言われて、アーサーに怒るなんて出来るわけが無い。もしやこの男は解っていてやっているのではないか。

一つ小さな溜息を吐いて、先程の軽いキスに応えるように彼の腕を引っ張って額に軽いキスを施した。しょうがないから許してやる。そんな意味を込めて。

「おおきにな」

正確にその意図を汲み取ったのか、今日見せた中で一番綺麗で無邪気な、満面の笑みを見せてくれた。

嗚呼、だからその笑みに弱いというのに。

思わず目を細めて、降ってきたキスの雨を、甘んじて受け入れた。

（後書き）

はい、かなり甘い話。

出来れば甘く、といわれて甘いを目指したのはいいですが、甘くしすぎて私が砂吐きそうです。書いてて恥ずかしかった・・・しかし普段書かないので楽しかった、と同時にかなり苦戦しました。甘い話ってあんなに展開進めづらいのかしら。

素で間接キスやってそうな二人が好きです。西英好きです。西英増えろ。

アントーニヨは菊の事を「菊ちゃん」と呼んでいるところをよく見ますが、本家の国名呼びで「日本」だったので呼び捨てかなと思って、しかし菊、と呼び捨てにするのも何だか絶大な違和感なので「本田」呼びにしました。勿論、フェリシアノは「イタちゃん」だったので「フェリちゃん」にします。本家に倣いますとも。

本文で出てきた「どちらの事を言っているのか解りやしない」という文章は自由に捉えてください。「どちら」の部分に何と何が入るのかは、まあ大体皆さん同じ想像でしょうが、特にこれといって指定はしません。一応決まってはいるのですが。

夏祭りネタなので、夏のこの時期に投稿しておこうと思ひまして・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9615v/>

夏祭り

2011年10月9日13時16分発行